

論文審査の結果の要旨

ハロルド・ラスキの思想世界—20 世紀における政治学と公共的知識人—

論文提出者氏名 大井 赤亥

本論文は 20 世紀前半を代表する英国の政治学者であり、また政治にも深くかかわったハロルド・ラスキ(1893-1950)の政治思想を、彼の初期著作から晩年までを通して、政治状況との関連で検討した研究である。ラスキについて言えば、初期著作における「多元的国家論」で学問的評価が定着している。しかし後期においてはマルクス主義を受け入れ、また左翼知識人としての国際的活動で著名であったが、その評価は分かれ、死後長く忘却されたという面もある。本論文は、ラスキの前期と後期を通じた活動を把握することにより、とくに後期についての学者としても政治家としても失敗だったという評価を覆し、学者/政治家という二元的な捉え方を乗り越え、知識人としてのラスキの意義を中心に再評価しようとする試みである。

本論文は序章と 7 つの章、および終章から構成される。

序章では、ラスキの研究史が論じられ、ラスキの死後 1950 年代からなされてきた英米圏およびソ連での研究が、それぞれ冷戦構造に規定されており、不十分である点が明らかにされる。次いで研究対象としてラスキの「教師」「政治家」「学者」「知識人」の 4 つの面が区分される。そしてラスキの伝記的な事柄が、彼の同化ユダヤ人としての面を軸として紹介される。

第 1 章では、ラスキが多元的国家論を確立したとされる、いわゆる初期三部作の論理が考察される。ラスキの批判対象は近代国家についての主権万能の考え方であったが、ラスキによればこれは中世カトリックの教義における「権力十全性(plenitudo potestatis)」に由来するものであった。それゆえ、ラスキは聖(ド・メーストルなど教皇至上権論者)および俗(ビスマルクなど国家主権万能論者)を問わず絶対性を主張する側を批判し、逆に両者の権力から個人の良心の自由と結社の自律性を擁護した論者(ラムネーやニューマンなど)を高く評価する。本論文はラスキのこの論理が首尾一貫して自由を擁護するものであったことを説く。

第 2 章では、ラスキの国家論が、その主著と目されてきた『政治学大綱』などをもとに、詳細に検討される。本論文によれば、この時期のラスキには、国家に福祉的な機能を求めるニュー・リベラリズムやフェビアン社会主義の影響が見られ、国家を単なる一団体とした初期の多元的国家論からの態度の変化が見出される。しかしラスキは、T.H.グリーンのような理想主義的国家論には距離を取り、さらに一元的国家論に近いボザンケには明確に批判的であったことが明らかにされる。本論文によれば、ラスキは国家が統合的機能を有す

ることを否定するわけではないが、国家にアプリオリな意志の統一を見出す見解を厳しく退けていたのである。

第3章以降は、ラスキが激動する20世紀前半の政治とどのように関わったかが歴史的に探求され、まず第3章ではファシズムと共産主義が扱われる。ラスキは当初、ファシズムと共産主義の両者を相似した「二つの全体主義」として批判する立場を取ったが、次第に両者を区別し、ソ連に「新しい文明」の可能性を見出すようになる。これ以後のラスキをマルクス主義への屈服と見て批判する研究もあるが、本論文はラスキがボルシェヴィキ的な暴力革命を容認しなかったこと、そしてソ連の現状に対する一定の評価には、個人自由の実現という、ラスキ自身の価値規準が存在したことが論じられる。

第4章はラスキのアメリカ論であり、ニューディール時代のアメリカ政治を同時代のラスキがどのように見たかが詳細に論じられる。ラスキはF.D.ルーズヴェルト大統領と親交があり、そのブレインに助言を依頼されてアメリカの政治にかかわるようになる。ラスキは、ルーズヴェルトのニューディール政策を高く評価し、その一層の急進化に期待をするが、それはルーズヴェルトやその側近の思惑とはかならずしも一致しなかった。しかし本論文は、批判者から政治を経済の従属変数に貶めたなどと言われるラスキが、そのニューディール論において逆に政治の自律性を評価し、資本主義を改革する可能性に希望を寄せたことを説く。

第5章は第二次世界大戦期のラスキの言論と実践を扱う。ここで中心となるのはラスキの「同意革命(revolution by consent)」の考え方である。ラスキはこの時期、ファシズムと対決し西洋文明を擁護することを最大の課題とするが、それに止まらず戦時動員体制を好機として、主要産業の社会化、教育や福祉のプログラム、計画経済などをイギリスの支配層に認めさせ、同意による社会主義の実現を試みる。このような目論見でのラスキのチャーチル首相への接近、また労働党幹部への働きかけはいずれも失敗に終わり、「同意革命」への評価は一般に高いものではない。しかし本論文はラスキの失敗を認めつつも、これらの試みのなかに、知識人ラスキの「知的道徳的ヘゲモニー」の実現、そしてマルクス主義の一般的公式とは逆に政治(上部構造)によって経済(土台)を変革することの可能性を見出している。

第6章では戦後冷戦下でのラスキの言動を論じる。戦後のイギリスでは労働党政権が誕生し、ラスキは世界的に著名な知識人として一般の労働黨員には人気を得るが、党幹部と対立し、党内における彼の影響力は失われていった。そして冷戦期になるとラスキは、かつてそれぞれに愛着を持ったアメリカとソ連の対立の深まりのなかで文明の将来を悲観し、個人的不運もあって悲しい人生の終焉を迎えたことが叙述される。

第7章は、前章までの歴史叙述を踏まえて、公共的知識人として生きたラスキの意義が論じられる。この章ではまず、サルトル、グラムシなど20世紀の代表的な知識人論が検討され、知識人がもとは体制維持的機能を期待されながらそれに反抗し、公共的知識人として民衆、労働者と連帯した重要な例としてラスキが位置付けられる。また数多くの知識人

批判にもかかわらず、現代においても知識人の批判的活動の意義が失われてはいないことが説かれる。

最後に終章では「持続するラスキ」として、現代に生きるラスキの意義を、ニューレフトとユーロ・コミュニズムの潜在的先駆、中間団体論、20 世紀のリベラリズムの左傾化などの諸点に見出している。

本論文の意義は以下の諸点に見出される。

まず、ラスキ初期の多元的国家論の規範理論的意義を明確化したことである。本論文が、ラスキが国家と教会の関係を論じるなかで、個人の良心の自由を擁護する見地からその団体理論を首尾一貫して展開したことを明らかにしたことは貴重な学術的貢献である。

つぎに、その後のラスキの著作と実践とを、20 世紀前半の激動する政治史のなかでのアメリカ、ソ連、イギリスに広がるラスキの政治実践の過程を、本論文は現地で資料調査を含め、膨大な資料をもとに明らかにした。広大なスケールでラスキの活動の全体像を明らかにしたことは、ラスキの視点から 20 世紀の政治史、国際関係史を見直すことにも貢献するものである。

さらにそのような叙述を通して、従来の研究でしばしば見られた、ラスキを失敗した政治家ないし政治学者とみなす一面的見解を崩したことである。本論文はラスキの公共的知識人としての活動を軸にラスキを再評価することを主眼としているが、同時に歴史のなかでのラスキの目論見の失敗や思考の揺らぎにも目を配り、公平な評価を行っている点において優れている。こうして、本論文は今後ラスキの思想史研究の信頼できるスタンダードとしての位置を占めることが大いに期待される。

最後に、本論文はラスキの思想史的研究に止まらず、現代政治理論への貢献も大きい。ラスキを通して、国家論、民主主義論、社会主義論、福祉研究、知識人論といったきわめて広汎な領域に本論文の関心は及んでおり、現代における民主主義、自由主義の可能性を歴史的な視野をもとに考えるうえで多くの実践的示唆を与えるものとなっている。

このように数多くの点で高い評価に値する本論文にも不十分な点が存在しないわけではない。それは「多元的社会主義」「リバタリアンのコミュニスト」「公共的知識人」といった本論文でキーとなるコンセプトについて、明確な定義が十分になされずに用いられている点である。もっとも、それらは本論文の叙述のなかで意味内容が明らかにされているとも言えるのだが、できればより明確に定義されるのが望ましい。しかしこのような欠点は小さなものであり、本論文の多大な学術的価値を損なうものではない。

以上の理由により、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。